



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十六号

2023/07/28 発行

題字：高橋弘美

九百枚もある推理小説を書いたらくたびれてしまい、先月はお休みをいただいたが、今号からまた元気に(?)復活する。

今月は秋田県に記録的な大雨が降ったが、幸いうちのほうはなんともなく、雨が過ぎたと思ったら梅雨が明けて、いまはもう連日三十度超えの世界である。でもこの暑さもせいぜいあと二週間だと思うと、クーラーなどつけるのがもったいないような気もするので、毎日汗をだらだら流しながら扇風機の世話になっている。

ぬくみで元気になったのか、畑の野菜どもが最盛期を迎えている。大雨の前は気温が上がらず肌寒いくらいだったので、野菜も成長が遅く収穫量も少なく、今年は冷夏になるのではないかなどと皆で心配していたのだが、杞憂だったようである。トマトは真っ赤になり、スイカが丸く大きくなってきた。キュウリのやつはちょっと目を離すとすぐおぼけみたいになってしまい、ミニトマトやスナップエンドウが鈴なりとはこういうことだと云って胸を張っている。夏である。だが夕暮れどきのヒグラシの声が早くも秋を思わせる。短い北の盛夏だ。

今号の内容

大雨のあと

後記に代えて

大雨のあと

七月十三日から、ちょっと怖くなるくらい雨が降った。夜中に目が覚めると、ドーンと滝のような雨音が聞こえてきた。はじめのうちは余裕の笑みを浮かべていたわたくしも、一日二日経つうちに、しだいに怖くなってきた。この大雨はちゃんと流れてゆくだろうか、地面がこいつを処理しきれぬだろうか、などと心配しはじめてしまい、なんだか夜もよく眠れないようだった。

雨は十四、十五と降り続いて、十六日の夕方に止んだ。その前の週からずっとぐずついた天気が続き、お天道様を最後に拝んだのはいつだったろうというようなあんばいだったので、雲間から太陽が顔を覗かせたときには思わず踊り出すかと思った。わたしはたまらず外に出て、家の周りを一周してみた。ちよつと地面がぬかるむようだったけれども、三日にわたって大雨が降ったとは思えないほど、大地はしっかりと水を吸いこんでいた。笠が手のひらほどもある大きなキノコが、芝生によきよき生えて

いた。キノコのやつは生意気にそっくり返り、どうだい、とでも云っているようだった。そこはちょうど浄化槽の埋め込みあたりであって、わたしはそのキノコがなにを栄養源にしてこのように立派に育ったか、しばし考えこんでしまった。

ミミズが水害に遭ったのか、地面の外に出てきて息も絶え絶えにのたかっていた。アマガエルが元気にぴよぴよ飛び跳ねていった。あれはたぶん、いつも我が家の思いがけないところに休んでいて、わたしを脅かすのを趣味にしているカエルであろう。ポストに手をつつこんだ拍子にぴよんと飛び跳ねて人の前に出てきてみたり、ドアを閉めようとすると隙間にへばりついていて人を仰天させたりする性悪なカエルで、わたしは一度ならず、こやつがいたずらに成功してさも愉快そうに喉を膨らまし、にんまり笑ったのを見た。ここしばらく、なんとなく柳鼠みたいな色になって干上がったような様相をしていたが、大雨で元気になったのか、みずみずしい緑色を取りもどして、四肢をいっぱい伸ばして威勢よく跳ねていった。

ふと近所の川はどうなっているだろうと思った。テレビなどでは、大雨のあとは川が増水しているから決して見に行くなというが、見に行きたいのが人である。わたしは川に向かって歩き出した。

うちのすぐそばを流れている川は、今回氾濫が心配された雄物川に流れこむ小さな川のひとつで、う

ちのもつと奥のほうにある山を源流として、このあたりの集落をめぐって流れたのち、雄物川と合体するのである。治水工事が完了したのはつい最近のことで、工事を担当したのは母の実家でやっている土建屋だったので、当時は社員であるところが毎日のように来ていたらしい。この工事のおかげで川は土手に囲まれ、容易に近づけなくなってしまったが、昔は子どもたちのいい遊び場で、叔父はこの川で魚釣りをしていたところが岩に頭をぶつけて大量出血し、母親に怒られ医者に頭を縫われてえらい目に遭ったという。びっくりするほど血が出たが、頭というのは傷の割に非常に多く出血するらしいことを学んだと、叔父は真面目な顔をして云った。

父の話によれば、あるとき集落の人たちが集まって川で涼んでいたとき、隣家の酒乱のおとつあんが、ふんどし一丁の姿も勇ましく、背中に子どもを三人も乗せて川底へ潜り、勢いよくぶかーっと浮いてきて、子どもたちはきゃっきゃと声を上げて笑っていた。それを見て、父は親子の情愛というようなものについてなにやら感じてしまい、うらやましく思ったという。酒を飲むと鉈を振りまわして妻を追っかけるような酒乱のおとつあんだったそうだが、しらふのときははいたって善良な人で、まだ若いうちに脳卒中を起こして右半身が麻痺してしまったが、左手一本でトラクターでも耕運機でもなんでも運転していたという。

このような記憶をたずさえて流れる川であるから、日照りのときには様子を見に行き、大雨のあとには見舞ってやるのが人情というものである。わたしは川をめぐって歩いていった。大雨のあとにも関わらず、地面はあまり濡れていなくて、田んぼも少し湿っているくらいなので、自分がいったいなにをそんなに心配していたのかと恥じ入ってしまうようなのである。二十年も都会のコンクリートの上で暮らした弊害であろう。わたしはどうも自然現象というものを人の頭で考えるくせがついている。

土手を上り、川を見下ろすと、わたしは思わず歓声を上げた。溜め池の整備や治水工事のおかげで、普段は川底の砂利を力なく舐めているような、ちよろちよろした流れの川であるが、その川が土手の中ほどくらいまでぐつと水位を増して、どうどうと音を立て、うねうねと波打って流れているのである。川幅は五メートル以上もありそうだった。

「いよう、きようだい！」
と川は云った。川の神がほんとうはどんな姿なのか知らないが、この川の主とか神とかは、わたしにとっては小さな竜で、なんだかやけに陽気で割り切りのいい、江戸っ子のおとつあんなみたいなやつなのである。

「どうだい！ え？ ちょっとしたもんだろ？」
川は嬉しそうに云いながら、平泳ぎしてみたり、背泳ぎしてみたり、なんとも機嫌よく愉快そうに流

れていた。わたしは見事なものだと云い、貴殿がこんな大きな川だとは知らなかったと云った。

「そうだろそうだろ、まあおれもちよつと本気出しゃあこんなもんさ。なかなかのもんだろ？ これだって、まだ遠慮してるほうよ。鉄道の鉄橋が流されたときの話聞いたろ？」

その話なら知っていた。もう半世紀以上も前のことだが、大雨で山ひとつ超えた先にある鉄道の鉄橋が流されたことがあった。その鉄道はこのあたりの人々の買い物や通勤通学の足だったのだが、設備の老朽化が進んでいたし、大幅な収益を出せるほどの利用客も見込めなかったのだから、結局、鉄橋の修繕は行われず、そのまま廢線になったのである。伯母はその鉄道で高校へ通ったが、父が高校へ通う頃にはもうバス通学に切り替わっていたという。

「あのときやおれだって、こんなもんじゃないかったよ。ドドドドと滝みてえに流れてつてな、ありや気持ちよかったねえ。あの手の大暴れはしばらくやってねえなあ。あれにやあちと及ばねえが、しかし、いいねえ、この流れつぶり、気持ちがいいね。飛ぶようだね。気分がすかつかとするね」

川はうつとりと目を閉じ、大きく波立ちながら気持ちよさそうに流れていた。わたしは川と並んで歩き出した。少し早足でなければ、流れに置いて行かれそうだった。

「お前さん、ゆんべおつかなくてよく眠れなかった

ろ？ この川が氾濫したり、あたり一帯が水浸しになっちまったらどうしようってな。どうだい、え？」

川はからかうように笑ってそう云った。わたしは罪を認め、少々恥じ入った。

「そうだろそうだろ、いい気味だねえ。おれだつてたまにやあ人様の気を揉ませたりしたいからね。だけれどもまあ、あの程度の雨じゃあ、せいぜいこんなもんですよ。あまり見くびらないでもらいたいねえ。もちつとおれらを信用してもらわなけりや困るなあ。この程度の雨でどうかなるようじゃあ、世の中みんなどうかなつちまうよ」

しかしよそのお国には、毎年のように大雨が降つて川が氾濫して、人々がえらい目に遭っているところがあるとなつては云った。自分たちばかりいつまでも水害に遭わないなどと思っていられないではないか。

「あのなあ、国には国の事情つてもんがあんだよ、わかるかなあ」

川はちよつとあわれむような声を出した。
「同じ水でも、水害がないかわりに、このあたりじゃ雪つてやつがいるじゃねえか」

わたしは思わずあつ、と声を上げた。

「そうだろ？ お前さんたちや水害に遭わないかわりに、毎年雪害に遭つてると思ひねえ。性質が違うから、水害のほうが目に見えるけどよ、雪だつてずいぶんひでえもんだよ。第一ありや陰気なんだよ。

どうも陰険なんだ、おれに云わせりゃあ。おれは雨が降ったら勢いがよくなるよ、んで日照りが続きゃあしぼんじまうよ。わかりやすいだろ、な？ だけど雪ってやつはどうもわかりにくい。いつ降り止むんだか、いつまで降って来やがるつもりなんだか、なに考えてんだかさっぱりわかんねえ。おまけに無口でしゃべりもしねえや。なんでああなつちまうのかね。静かにひっそりやるってのが第一陰険だね。何ヶ月も啞みてえに黙りこくって、飽きもしねえでモソモソ、モソモソ降りやがる。吹雪になりやあもうみんなおっかなくて、黙って背中丸めてやりすごすしかない。やつぱり冷てえつてのがよくねえんだな。寒さつてのはものごとを陰気にしちまうよ。おれみてえにドーツと派手に音立てて、そら行くぞーってな具合にこう、わつとやつちまうのがカラリとしていいんだよ。わかりやすいだろ？ だけど雪の野郎はどうも……」

川のやつはどうやら雪のことがあまり好きでないようだった。そんな話をしているうちに、わたしたちは大きなカーブにさしかかった。「お前さん、車運転するときに、カーブが怖いだろ？ わかるんだなあ、おれにゃあ。頭で考えるからよ。流れに乗っちゃうんだよ、こう、体ごとすうーっと。おれを見てみねえ」

川のやつはいかにも気持ちよさそうに、流れに身を任せ、大きなカーブを悠々と曲がっていった。曲

がりきってしばらく流れていくと、左手に樋門が見えてきて、水が白い波を立てて、勢いよく排出されていた。「ようつ、相棒！」

川は自分に合流してきた水に陽気に話しかけた。「気分はどうだい、え？」

川は底抜けに陽気で、この上ない上機嫌だった。茶色く濁った水をまとい、巨大なへビが動くようにうねり流れながら、川は川であることの喜びを存分に謳歌しているように見えた。大雨や氾濫がこんなに川にとつて気分のいいことなら、人間が治水工事をして、ダムや溜め池をつくって、川の流れをひ弱なちよろちよろしたものになっているのは、川にとつて一種の不幸なのではないか、われわれは川の喜びのために、ときどきはこうして川に道を譲り、大雨や浸水や洪水の被害というものを受け入れるべきなのではないかなどと思ったりした。

「あのなあ、そう深刻に考えるからいけねえのよ」川は諭すように云って、首を振った。

「ものごとつてのはそういうふうに見えるようなもんじゃねえんだ。わかんねえかなあ。かわいそうなの、不幸だの、見ていて痛ましいだの、そいつが人間の欠点ですよ」

川は嘆かわしげに云った。「おれを見ねえ。日照りが続きゃあ干上がっちゃうって、もう赤ん坊を寝かしても潮れもしねえなんて川

になっちゃうよ。な？ だけでもこうやって二、三日雨が降りゃあ、もうこんな大きい流れになるだろ。んで、そいつはみんなお天道さんしだいさ。でもおれはお天道さんじゃねえ。つまり、おれにゃあどうにもできねえつてことで、どうにもできねえつてことは、どうでもいいつてことさ。

そりゃ、今日みてえな日はおれは気分がいいよ。自分がうんと強くて、偉くなった気がすらあ。だけど、そんなのはあと何日かのことで、ずっと続くわけじゃねえや。勢いつてのは、あるときはこつちにあつて、また別のときにはあつちにある。そうやって、絶えず動いてるもんさ。それを人間ってやつは、あれが理想だの、これが好ましいだの云つて、ものごとをひとつの状態に押し込めようとするんだな。お前さんはかわいそうだなって云うが、おれは自分がチヨロチヨロのしみつたれたしよんべんみてえに流れてるときのことを、別になんとも思わねえんだ。ひと雨降りゃあ、また大きくなるつて知ってるからよ。人間の都合で管理されてるとか、情けねえとか不幸だとか、これっぽっちも思わないね。管理してるのされてるの、かわいそうだの腹が立つだのなんて、それこそ人間の手前勝手な考えよ。チヨロチヨロのしよんべんだろうが大河だろうが、おれはおれだよ。ゆんべのおまえさんは怖くて眠れなかった。だけど今日の夜にはもう高いびきかいて寝るんだ。そんなもんだろ。そんだけのことさ。それでい

いじゃねえか」

いつの間にかわれわれは、雄物川に合流するあたりまで来ていた。土手が終わりに近づいた。

「おまえさん、海が怖いって云ったろ」

川はくるりと身を翻してわたしを見て笑った。

「おれはなあ、これからその海まで行くんだよ。今度もし海に行くことがあったらよ、海の野郎に、おれのなじみだって云いねえ。そんなときおれがすぐ来てやれるかどうかわかんねえけどよ、まあそうひどい扱いは受けねえだろ。海なじみにやなれねえだろうけどな。そうなるにはまた別の生まれが必要だからよ。因縁ってやつだよ、わかるかなあ、え？」

「云い終わると、川は勢いよく、増水し川幅を増した雄物川へ合流していった。」

「来たぜ、きょうだい！」

後記に代えて

川を見に行ったあとで、ぶらぶら家に戻ってきたが、途中の田んぼのあちこちに、様子を見に来たとつつあんがいて思わず笑ってしまった。トラックが農道に何台も並んでいて、なんとなく不安げな顔

つきで稲の様子を見てまわる男どもがそこらじゅうにいるのである。別家の家の前を通ったら、別家のおとつつあんがランニングシャツ姿で首にタオルを巻き、さつそく小屋のシャッターを開けて、なにか仕事をはじめるところだった。わたしの眠れぬ夜の不安というやつが、いかに愚かで浅はかなものか思い知るようだった。

ヨガをはじめてもう一年になるが、一年も経ってから、ようやく体幹というのがなんのことなのかわかりはじめ、ヨガは腹式呼吸で行うということも、最近やっと気がついたしだいである。こういうごく初歩的なことを一年も二年もやらないとわかってこないというのが、わたしの愚かさのあらわれであるような気がするが、愚かしく生まれたものは仕方がない。車の運転をはじめてからも一年近く経とうとしているが、これなんか、まだなんにもわからないのである。なにがわからないのかすらわかってこないのだが、小さいころからでんぐり返りのひとつもできなければ、自転車に乗るのだって何年もかかったそうなので、車だっておそらく何年もかかるはずである。身体についての認識がえらく鈍いというか、脳と体の連携がひどくまズいのが運動オンチの特徴で、そんなことは昔からわかりきっていたことだから、ひとつづつ気を長くして行くことにする。

が、ダイエットというのは、体重の増減だけでなく、こういう自己と体との関係のまズさのような認識をも含む、非常に幅広い全的な営みであるような気がする。もつともそれがわかったところで、体重が減るわけでは少しもないのだが。

二〇二三年七月二十八日

水澤雪下

<https://nijibms.com/>



歌川国芳の龍二選。左はタイトルもズバリ「龍」だが、右は龍神に追われる玉取姫の図。